

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和4年 5月 23日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	岡本優芽

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
幸島観察所
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和4年5月9日 ~ 令和4年5月15日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター附属 幸島観察所、鈴木 崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くて結構です。
<p>本実習では、幸島に生息する野生のニホンザル (<i>Macaca fuscata</i>) の観察を行った。霊長類学発祥の地として知られる幸島での観察を通し、ニホンザルの形態や特徴について知ると同時に野外調査の基礎を学ぶことができた。合わせて、観察所周辺の散策や都井岬、宮崎県総合博物館を訪れ宮崎県の特徴や動植物についての理解を深めることができた。</p> <p>●スケジュール 5/9 幸島観察所へ到着。観察所周辺へのカメラトラップの設置 5/10 都井岬での野生馬の観察 5/11 幸島観察所周辺の散策 5/12 宮崎県総合博物館、鶴戸神宮の見学 5/13 カメラトラップの回収、カメラやGPSの記録解析 5/14 幸島にてニホンザル観察、島内の散策 5/15 幸島にてニホンザル観察、帰宅</p> <p>●成果 ○カメラトラップ 観察所周辺に1人1個、合計5個のカメラトラップを設置した。結果1人のカメラトラップでイノシシの写真が撮影された。イノシシが観察されたカメラは沢の近くに設置されており、水を飲みに来た際に撮影された可能性が考えられる。私のカメラはイノシシが撮影されたカメラの場所から山を登った所に設置したため沢に向かう動物が通ることを期待したが、写真が5日間で3477枚撮影されていたものの、動物は全く撮影されていなかった。原因としては植物の動きなどに誤って反応し大量に撮影されたか、何らかの原因でカメラがうまく作動しなかったことが考えられる。カメラの状態確認や設置場所と設置角度の設定の重要性を学ぶことができた。</p> <p>○都井岬 都井岬では生まれたての仔馬を観察することができた。へその緒がまだついていたもののしっかりと立ち歩く様子が見られた。母親が周囲を絶えず警戒しており、母子に近づきすぎたウマを追い返す場面も観察された。一方、既に生まれてから数日が経過した別の母子のペアは近づかれてもあまり気にしない様子であった。基本的にウマは草を食べ続けていたが、お昼が近くなると座って眠る個体も観察することができた。</p>
(図1: 都井岬で見られたミサキウマの母子)


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

○幸島観察所周辺の散策

幸島観察所を出発し、周囲の山道を歩き、動植物が観察された場所をGPSで記録した。小雨が降り続いていたためもあるだろうか、コンクリート道路と山道ではカエルとカニが多く観察された。山道ではアカショウビン (*Halcyon coromanda*) の鳴き声やタヌキまたはアナグマと思われる哺乳類を観察することができた(哺乳類はすぐに逃げたため、大まかなサイズしか分からず種の同定は難しかった)。また、途中にある山ノ神の祠でコウモリが見られた。



(図2: コウモリがいた、山ノ神の祠)

○宮崎県総合博物館

博物館は自然史展示室、歴史展示室、民俗展示室の3つの展示室からなり、現在「第42回 SSP展～自然を楽しむ科学の眼～」の展覧会も開かれていた。宮崎の地形、自然、歴史、祭の詳しい展示が大変魅力的で興味深かった。宮崎には照葉樹林が広がっているが、宮崎のみならず東アジアに広がる照葉樹林の分布や代表的な場所の写真なども展示も見られた。自然史展示室には多数の標本があり、前日の観察所周辺の散策で見られた生物もみることができた。散策では生きた生物をたくさん観察できたが、標本では分類別に他の種と比較することができ、大きさや色などの微妙な違いに気づくことができた。鳴き声は聞こえたが姿は見られなかったアカショウビンの標本をみられたことも、印象に残っている。

○幸島

実習期間において雨が続き島へ渡れるかが懸念されていたが、晴れ間がのぞいた土曜日と日曜日の午前中に幸島での観察を実施できた。土日は天候に恵まれ、海岸や森の中でのニホンザルの様子をたくさん観察できた。幸島のサルの特徴としてイモ洗い行動や麦洗い行動(砂金採取法)が知られている。私は麦洗い行動の際の手の使用に興味を持ち、採餌時間に観察を行った。麦洗いを行った個体は3個体(タネ(メス)、シデ(メス)、シカ(α オス))おり、いずれの個体も水に浮かべた麦を口へと運ぶ際は両手を交互に使用していた。しかし、砂の上にまかれた麦を集める際に使用する手は個体ごとに異なっていた。タネは観察した4回すべて右手を利用しており、シデは観察した25回のうち24回は右手を使用、左手の使用は1度だけ見られた。右手で麦を含む砂を団子のように塊にして持ち、水場へ移動して手を横に動かすように移動して塊を広げていた。一方シカは、はじめに左手で麦を掴み、その後右手で麦を掴んで両手に麦を手にした状態で水場へ移動し食べる様子が頻繁に観察された。観察した53回中右手のみの使用は一度も見られなかった。左手のみの使用は14回見られた。それ以外は両手を使用していたが、左手から先に使用することが多かった。また、シデとは異なり砂を団子状にまとめたりはせず、単純に掴むだけだった。観察を通して、麦を集める際に使用する手は個体ごとに異なっていること、麦の集め方にも個体差があることが分かった。1度だけの観察だったため使用する手が決まっていると断定することは難しいが、もし個体ごとに頻繁に使用する手が決まっているならそれは血縁などに関係があるのか、など興味が湧いた。



(図3: シカの麦洗い)
(図4: 左手で麦をとるシカ)

6. その他 (特記事項など)

本実習はPWSよりご支援いただきました。実習へのご支援感謝いたします。また、実習の引率と丁寧なご指導をしてくださいました杉浦先生、鈴木様、幸島までのボートを運航してくださいましたボートドライバーの皆様へ深く感謝申し上げます。